野地潤家氏著

歌集「柿照葉」

おほらかに柿の照葉は見んものを汝を憶へばやすけくもなし（四五頁）

はにかみし際の面わははしけやし柿の照葉の光と匂へる（四七頁）

これは、集中、「柿照葉」と小題を附した一連一四首中の二首である。歌は、澄明な秋の光に輝いている柿の照葉を見ていると、そこに、「面わははしけやし」「汝」のおもかげがたって、柿照葉と汝のおもかげとが、重なり合ってしまうというような、そういう深い嘆息をうたっている。そうして、おさめるところの全歌三〇〇首は、ことごとく、この「汝」にかかわっているのである。歌集に命名するのに、著者が、「柿照葉」の語をもってしたことは、この集の性格を、さながらにあらわし得たものと、いうことができるだろう。「柿照葉」は、まさに、「汝」によせる鎮魂の歌の集なのである。類書をみない、まことにまれな歌集である。しかも、「汝」が、原爆死した少女であってみれば、この集が、いわゆる原爆文学なるものに、さらに貴重な一書を加え得た意味は、大きいといわねばならない。

作品は、「満三〇年ぶりに、ながく筐底に潜めてきたふるい歌稿の中から」（「まえがき」）選ばれたものであって、昭和二〇年に、二五六首、翌二一年に、四四首が録されている。作品の随所に、たとえば、

裏白の群落の下をゆく水のゆふべとなればいよいよ咽ぶ（四四頁）

まをとめのあかきこころのあきらめに柿の照葉は見るべかりしを（四八頁）

などの作にうかがえるような、清楚で甘美な情感が流露しているのは、制作動機の、重厚深沈による以上に、抒情詩本来の面目を発揮するにふさわしい、三〇年前という、著者のわかわかしい生によるところが、大きいであろう。これはまた、本書の別の特色でもある。

この集の作歌の動機を、「まえがき」についてみよう。著者は、太平洋戦争下、広島市で学生生活をすごす間、一年間ほどを、女学校入学志望の、当時国民学校六年生であったひとりの少女のために、家庭教師をしていた。少女は女学校に入学したが、著者はその翌年、学徒勤労動員のため、学園を離れ、ついで陸軍に召集され、敗戦に及んだ。やがて、昭和二〇年一〇月、ひさびさに母校を訪ねることのできた著者は、教え子の少女が、原爆の投下された八月六日に、倒壊した家屋の下敷となり、そのまま、のがれることができずに、「惨死」したことを知らされ、大きな衝撃を受けた。少女の霊前にぬかずいた一一月四日は、くしくも、著者が満二五歳を迎えた誕生日であったが、その日から、少女をいたむ歌を作りはじめた。そうして、翌二一年七月四日までの八ケ月間に、五四〇首にのぼる挽歌をうたいついだ。

この歌集に、感吟にたえた佳品の多いわけも、右に述べたような作因を知るならば、きわめてしぜんに、納得のいくことである。喜悦であれ、悲情であれ、ふかい感動をモチーフとしないかぎり、佳品の生まれうべくもないことを、いまさらのように教えられるのである。

一年とそこそこの、きわめてみじかい間の師弟のつながりであったにもかかわらず、これほどの哀切を吐露することのできる著者の集中力は、きっと、これら鎮魂のうたを、亡き少女のもとに、とどかせていることであろう。さいごに、佳什三首を抄しよう。

深みゆく天のまほらを瞳の澄みし汝の在処ときめてなげかふ（九頁）

ほのぼのと人こふほどの汝なりしあはれとおもへ忽ちになし（四九頁）

一瞬に汝を失ひしはかなさやつひの面わにむかふことなく（七〇頁）

（昭和50・7・15、溪水社刊、B6版一二四ページ。八〇〇円）

（松田芳昭）